



アメリカ南西部ニューメキシコ州で発見された更新世の足跡

中沢 祐一（北海道大学大学院医学研究院 人類進化学教室）

引き続きコロナ渦に憂愁を抱く9月のある日、ヘッドラインニュースに瞠目した。アメリカ合衆国南西部ニューメキシコ州のホワイトサンズ国立公園で最終氷期最寒冷期のヒトの足跡が発見されたという。あわてて確認したサイエンス誌の論文 (Bennett et al. 2021a) は、足跡の科学的根拠を多角的かつ周到に評価していた。白い砂層に刻まれた無数の足跡は前衛芸術を見るようで、メキシコ国境へと続くまぶしい荒野とそこに付加された記憶へとたちまち引き戻された。2000年代に私はニューメキシコ州とその西に接するアリゾナ州で様々な発掘調査に従事したことがある。緊急調査がほとんどだったが、アメリカ南西部考古学についての若干の経験も得た。本稿では発見された足跡からわかる行動的情報、南西部の環境や考古学について、私的記憶の断片を交えつつ紹介したい。

1. ホワイトサンズの環境・歴史・遺跡

ホワイトサンズはその名が象徴するように白い砂丘が見渡す限り広がる高地砂漠であり、現地立つとルーク・スカイウォーカーの故郷に来たような感覚になる。地質的にはホワイトサンズの白い砂はジブサムであり、南北に平行する二列の山脈と北の山地で囲まれた広大なトゥラローザ盆地 (13,700km²) の南部にある。現在は乾燥したトゥラローザ盆地だが、更新世にはその南にオテロ湖と呼ばれる広大な湖があった (図1)。オテロ湖の拡大・縮小の変化は盆地南部の風成と水成の堆積物に記録されている。45,000年前から盆地に水がたまり始め、標高1204mの高所にある水成堆積層の年代からは15,660年前まで湖の拡大が続いたことが明らかとなっている (Allen et al. 2009)。更新世末に始まった乾燥化により、露出した湖底の堆積物から吹き飛ばされたジブサム砂がオテロ湖の東側にホワイトサンズの砂丘を形成した。砂丘の基底を成す堆積物の光ルミネッセンス年代から、湖底の浸食と砂丘の形成のピークは7000年前以降の完新世半ばであった。

西部植民以来、ニューメキシコは辺境の土地である。盆地中央のトリニティーと呼ばれる場所には第二

次世界大戦時には核実験場が設けられた。この地でトルーマン政権下におけるマンハッタン計画に関与した科学者と軍部らが1945年7月16日に核爆弾を爆発させ、ひと月を待たずに広島と長崎に原爆が投下された。トリニティーの核実験は周辺住民に告知されずに実施され、被爆した人々は今も健康被害に苦しんでいる。過小評価されてきた被害の実態だが、州知事らの訴えもあり米議会はようやく2021年9月22日にトリニティーの周辺住民に対しても被爆補償法を適用することを認めた。

更新世の湿潤期には北米南西部・西部の乾燥地帯にも湖沼があり、現在はプラヤと呼ばれる窪地が残される。プラヤ周辺には更新世末 (フォルサム、クローヴィス) の遺跡が確認されることがあるが、トゥラローザ盆地内では少ないという (Holliday et al.



図1 ホワイトサンズとその周辺 ジブサム砂丘 (実線), オテロ湖の最大範囲 (点線), ホワイトサンズ第2・第3地点 (□). 衛星写真はGoogle Earth Pro.

2019)。こうした遺跡は踏査によって確認され、時期推定は尖頭器など特徴的な形態をもつ石器からの判断によるものがほとんどのため、示準石器のない石器集中の時期を評価できていない可能性は残る。調査の粗密もある。ホワイトサンズ国立公園の周辺はミサイル発射場となっており、連邦政府が行うプロジェクトの影響下にある土地であるため、行政法に基づく考古学的踏査がしばしば実施されている。1987年に行われた20.5km²区画踏査でも422カ所の遺跡が記録され、内27遺跡が発掘された(Doleman et al. 1992)。砂の移動が激しい砂漠地帯では概して遺構の確認は容易ではない。ホワイトサンズから90km程南下したテキサス州境にまたがるフォートブリス軍用基地も砂漠環境にある。行政調査で私も訪れたことがある。軍曹から役立つとは思えない不発弾講習を受けた後、現地の考古学者が検出した住居を見学した。地山と覆土の区別も困難な砂地であり、発掘の手腕に舌を巻いた。

2. 足跡からわかること

広大なホワイトサンズに観光客が気楽に踏み込めるのは州道沿いに整備されたごく一角である。今回ヒトの足跡が報告された遺跡(ホワイトサンズ第2地点)は、砂丘地帯の西のはずれ(オテロ湖東岸)であり、州道からは10km以上離れる(図1)。トレンチ内からは全部で61のヒトの足跡が検出され、層位を異にする8つの「足跡面」が区別される。現代の足跡との形状比較もなされ、ホモ・サピエンスの足跡という結論が出されている。複数個人の歩行が明らかである。長さは16.8–25.8cm、平均値が21.1cmということも詳細に復元され、女性もしくは10代前半の足跡とされる。足のサイズからは身長、歩幅からは歩行速度といったように歩行者の身体的・行動的側面までもが推定されている。

砂地ゆえに地表面での遺構確認は難しいトゥラローザ盆地だが、雨が降った際に足跡を埋める堆積物が周囲の堆積物よりも湿度を多くもつことから、露出した足跡の形がうっすらと確認できる。オテロ湖岸では更新世動物の足跡が多数見つかり、サイエンス誌の論文の前に報告されたオテロ湖東岸の第3地点(図1)では、各種の動物(絶滅大形動物、中形肉食獣、偶蹄目)とヒトの足跡が共存する例が確認されている(Bennett et al. 2020; Bustos et al. 2018; Urban et al. 2018)。数本の論文を読んだだけだが、生痕学の進展と情報量の厚みは感興を引いた。驚嘆すべきは、対向に並走する二列の足跡だ(Bennett et al. 2020)。並走する足跡は南北軸にほぼ平行し、相互に0.5–2mの間隔をとりつつ、約800mも続く。足跡の大きさ、深さ、形状からおそらく同一人物がそれほど時間

を空けずに往復した跡であることが推測されている。足跡は23–24cmであり、現代人データとの比較からは10代前半から後半、現代人との栄養状態の違いを考慮すると女性であれば少し年長だろうことが指摘される。右足が左足よりもやや大きいことから、片側に体重が多くかかっていたことを意味する。さらに、この足跡に重なって少なくとも3カ所に3歳児くらいの足跡が残されていることから、子供を右半身に抱えながら歩いていたことが推測されている。もちろん論文では言及していないが、子供を抱えた母親が白い砂に足をとられつつも湖岸を横切り、やがて戻ってくる映像が目に見えよう。

もう一つの知見は、この対向する二列の足跡に絶滅大形動物の足跡が重複する点である。足跡の形状から動物種はオオナマケモノとコロビアマンモスとされる。二列の足跡(3B地点)を横切るマンモスの足跡は、ヒトの足跡を一部押しつぶしていることからヒトの存在を感知しえたこととされつつも無反応だったと説明される。別の場所(3F地点)には並列するヒトの足跡を横切って1頭のオオナマケモノの足跡が残されており、北へ続く方のヒトの足跡の上でオオナマケモノが巡回している。巡回の初動を示す前肢の痕跡が欠けていることからオオナマケモノがヒトの足跡を感知した瞬間に後肢によって二足立ちしたこと、それはヒトの匂いを嗅ぎまわる行動、おそらく捕食者であるヒトへの警戒反応だったと考察している。他方、ヒトもケモノが闊歩する野生空間を子連れで歩いていた。無茶なようだが、同じホモ・サピエンスでも更新世の人々は現代人よりも五感や体力を駆使したサバイバル能力がはるかに高かったと考えるべきだろう。私的回顧だが、2008年のアリゾナ州の遺跡調査を思い出す。トラックで移動中、前方のゲートを開閉するため私が対応した。トラックが通過したのを確認しゲートを閉じて車内へ戻ろうとすると仲間が色めきだっている。「おまえのすぐ後ろをマウンテンライオンが横切った」と言う。気配すら感じなかった。都市生活にスポイルされた現代人は身近な環境情報を的確にとらえる感覚すら鈍らせているのだ。

3. 年代

さて足跡の年代決定はどのようになされたのか。すでに絶滅大形動物(オオナマケモノ)の絶滅年代と乾燥期が始まり湖岸が干上がるタイミングから、15,660年以降10,000年前以前であることが推定されていた(Bustos et al. 2018)。ホワイトサンズ第2地点(Bennett et al. 2021a, b)で提示されたのは、足跡が残された堆積物に含まれる植物種子から得た放射性炭素年代と、ジプサム層をウラン系列法によって測定した年代であり、これらの年代と足跡を包含する

層序との対応が明示された。ここでは ^{14}C 年代のみを紹介する。植物種子は*Ruppia cirrhosa*という水生植物(水草)である。測定した種子(11点)の較正年代値は $22,860 \pm 320 \sim 21,130 \text{年} \pm 250 \text{年前}$ を示す。放射性炭素年代の正確性については3つの観点から検討されている。第一は、水生植物は生息環境の水に溶けている無機炭素を取り込むため、その量が大气中の炭素量に比べて少なかった場合、古すぎる年代が得られる点である(硬水効果)。サンプルが包含される深さと年代の関係をベイズ統計学によってモデル化した結果、足跡に伴う種子の年代への硬水効果の影響は無視できるくらい小さいという。第二は、種子にフミン酸などの外来の炭素が吸着している可能性だが、前処理によってこれも解決している。第三は、古い種子がリワークした可能性である。これは、上層から下層へ行くほど年代が古くなる明瞭な傾向がある点をもって否定している。確かに層序と年代の整合性は高い。11点の年代値の内2点のみが上下一新旧対応に合わないが、それでも年代値の差はわずかに数百年程である。全ての年代値が最終氷期最寒冷期に収まり、北米最古級の遺跡となる。

4. 足跡の意義

ホワイトサンズにおける足跡発見の意義は、やはり足跡という痕跡そのものもつ情報量の多さだろう。考古学の遺跡調査ではよくin situかどうかということの判断が求められる。南西部の行政調査でも確認された遺跡や採集遺物が十分な歴史情報をもつかが遺跡の意義評価に関連して問われる。だが、石器などの遺物は埋没過程で動くことが常である。妍さえも砂丘地帯では移動し層序が逆転することがあり、in situをどのように意味づけるのかは突きつめる程あいまいになる。遺物(石器や各種遺存体)と異なり、足跡はその場所に実在した主体者(ヒトやケモノ)とその行動内容を示す揺るぎなき証拠である。主体者の時間と空間を特定する存在であり、in situでない可能性は排除できる。足跡は歩行者の体重と堆積物の固さのバランス、浸食・埋没条件などの要素が絶妙に作用して残されたわけだが(Bennett et al. 2021b)、歩行者の「生態」の一端を知らずとも記録してしまったという意味でも行動解読のための手堅い資料である。その重要性ゆえに論文でも遺跡の正確な位置は秘され、考古資源保護法、国立公園オムニバスマネジメント法、古生物資源保護法によって多重の法的保護がかけられている。

もし日本でこうした足跡が確認されたとしたらどうなるだろうか。自治体の埋蔵文化財調査であれば、目の前の開発との妥協という発想から3D記録や堆積物ごと切り取って移設保管といった記録保存の方法がとら

れることも想定される。しかし先述したように足跡は真正のin situであり、移設保管といった方法では周辺の環境情報を明らかにできる余地もない。加えて、土壌中からヒトを含むDNAを抽出することが実現しており、現場でのサンプリングと分析は不可避である。調査方法や法制度の見直しも視野に入る。ホワイトサンズの調査者たちが発掘によって足跡が露出すると風化してしまうことを気遣い、それを防ぐために地中レーダ探査による検出精度を検討している点(Urban et al. 2018)は傾聴される。同時に露頭でみられる層のたわみ(踏み込み)も記録している。果てしない砂漠地帯で偉大な発見をもたらした調査者へ敬意を表すとともに、私たちがその探求心に学ばねばなるまい。

参考文献

- Allen, B. D., Love, D. W., Myers, R. G. (2009). Evidence for late Pleistocene hydrologic and climatic change from Lake Otero, Tularosa Basin, south-central New Mexico. *New Mexico Geology* 31(1), 9–25.
- Bennett, M. R., Bustos, D., Odess, D., Urban, T. M., Lallensack, J. N., Budka, M., Santucci, V. L., Martinez, P., Wiseman, A. L. A., Reynolds, S. C. (2020). Walking in mud: Remarkable Pleistocene human trackways from White Sands National Park (New Mexico). *Quaternary Science Reviews*, 249, 106610. <https://doi.org/10.1016/j.quascirev.2020.106610>
- Bennett, M. R., Bustos, D., Pigati, J. S., Springer, K. B., Urban, T. M., Holliday, V. T., Reynolds, S. C., Budka, M., Honke, J. S., Hudson, A. M., Fenerty, B., Connelly, C., Martinez, P. J., Santucci, V. L., Odess, D. (2021a). Evidence of humans in North America during the Last Glacial Maximum. *Science* 1531(September), 1528–1531.
- Bennett, M. R., Bustos, D., Odess, D., Urban, T. M., Lallensack, J. N., Budka, M., Santucci, V. L., Martinez, P., Wiseman, A. L. A., Reynolds, S. C. (2021b). Supplementary Materials for Evidence of humans in North America during the Last Glacial Maximum. <https://doi.org/10.1126/science.abg7586>
- Bustos, D., Jakeway, J., Urban, T. M., Holliday, V. T., Fenerty, B., Raichlen, D. A., Budka, M., Reynolds, S. C., Allen, B. D., Love, D. W., Santucci, V. L., Odess, D., Willey, P., McDonald, H. G., Bennett, M. R. (2018). Footprints preserve terminal Pleistocene hunt? Human-sloth interactions in North America. *Science Advances* 2018; 4 eaar7621.
- Doleman, W.H., Chapman, R.C., Stauber, R.L., Piper, J. (1992). *Landscape Archaeology in the Southern Tularosa Basin Volume 3*. OCA/UNM Report No. 185-324F, WSMR Archaeological Report No. 92-6.
- Holliday, V. T., Harvey, A., Cuba, M. T., Weber, A. M. (2019). Paleoindians, paleolakes and paleoplays: Landscape geoarchaeology of the Tularosa Basin, New Mexico. *Geomorphology* 331, 92–106. <https://doi.org/10.1016/j.geomorph.2018.08.012>
- Urban, T. M., Bustos, D., Jakeway, J., Manning, S. W., Bennett, M. R. (2018). Use of magnetometry for detecting and documenting multi-species Pleistocene megafauna tracks at White Sands National Monument. *Quaternary Science Reviews* 199, 206–213. <https://doi.org/10.1016/j.quascirev.2018.07.012>

2020年度日本旧石器学会賞受賞者報告

ニュースレター48号で報告しました通り、2020年度学会賞を加藤真二会員（奈良文化財研究所）、2020年度論文賞を尾田識好会員（東京都埋蔵文化財センター）、2021年度若手奨励賞を青木要祐会員（受賞時）東北大学大学院、(現)新潟大学が受賞されました。「日本旧石器学会賞選考委員会による選考理由」および「受賞者の言葉」を報告いたします。

2020年度学会賞

加藤 真二 会員（奈良文化財研究所）

選考理由

学会賞は、旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員に授与する。学会員からの推薦に基づき、当委員会は加藤真二会員を2020年度の学会賞受賞候補者として選考した。

加藤会員は、長年に渡って中国旧石器研究に携わり、常にその成果を発信し続けてきた。2000年には、『中国北部の旧石器文化』を出版し、中国旧石器時代の時期区分と技術変遷をまとめた。本書は、加藤氏が遂行した膨大な資料調査と文献調査に基づき、網羅的な中国旧石器時代データが提示されている。また、加藤会員は、中国人研究者と共同で中国華北地方に所在する霊井遺跡の細石刃石器群の調査研究を進め、矢出川技法は中国華北地方で出現し、この技術が西南日本に伝播したとする仮説を提示した。近年では、中国の約20～2万年前の134の石器群を類型分類し、その時空間変遷をまとめた成果を『日本旧石器研究』第15号に投稿した（「中国の旧石器—その石器群類型と編年—」）。これらの成果は、日本列島に近接する東アジアの旧石器時代の概要を把握する上で重要な情報源であり、日本旧石器研究の発展に資するところ大である。以上の理由により、加藤会員の業績は学会賞に相応しいと考える。

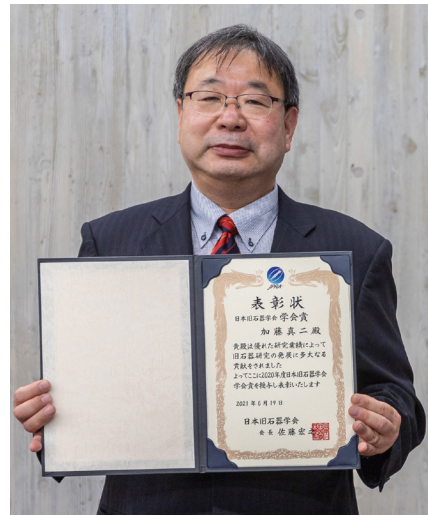
（日本旧石器学会賞選考委員会委員長 佐野勝宏）

受賞の言葉（加藤 真二）

このたびは、名誉ある日本旧石器学会学会賞をいただきましたこと、たいへん光栄に感じております。

今も高校1年時の担任の言葉「勉強は、世のため、人のため、おのれのためにするもんじゃ」が心に刻まれています。選考理由にあるように、長年に渡って中国旧石器研究に携わり、常にその成果を発信し続けてきました。また、日本の旧石器研究を中国に紹介することもしてきました。こうした営みが、自己満足ではなく、この地域の旧石器研究の発展に役立っていると評価いただいたこと、とてもうれしく感じています。

今、中国では、八〇后、九〇后と呼ばれる80年



加藤 真二 会員

代、90年代生まれの若い研究者が多くの素晴らしい調査・研究成果をあげています。彼らは、また、日本の旧石器研究にもとても強い関心を払っています。一方、日本の旧石器研究の状況はどうでしょうか。これまでも何度か書いているように、旧石器時代には国境も国籍もなかったのです。是非、若手の皆さんには柔軟な発想と広い視野をもって研究を進めていただきたい。そのためには、いましばらく、中国の最新の調査研究の成果を日本に、そして、日本の研究成果を中国に伝えるとともに、若い世代間の交流の橋渡しをしたいと考えています。

今回の学会賞は、あと数年で還暦を迎える私に、現状に満足することなく、これからも、東アジア全体の旧石器研究の底上げに尽力するとともに、本来の私の研究テーマ「外から見た列島の旧石器文化」を進めるようにと鞭撻するものと思っています。

最後に、これまでの私の研究は、恩師の加藤晋平先生をはじめ、多くの内外の先輩や仲間達、そして、妻に支えられてきたものです。皆様に衷心より感謝申し上げますとともに、今しばらくのご指導ご鞭撻よろしくお願ひします。

2020年度論文賞

尾田 識好 会員（東京都埋蔵文化財センター）

選考理由

論文賞は、会誌『旧石器研究』に優れた業績を発表した会員に授与する。当委員会は尾田識好会員を2020年度の論文賞受賞候補者として選考した。

尾田会員は『旧石器研究』第15号（2019）に「武蔵野台地における後期旧石器時代初頭の編年と行動論—武蔵台遺跡の分析を中心に—」を発表した。本論文で対象とした東京都府中市武蔵台遺跡は、後期旧石器時代初頭の遺跡で、そこで出土した立川ロームX層

の石器群は、「Xb文化層」と「Xa文化層」の異なる編年段階に区分できるか否かで長らく論争の対象であった。尾田氏は、研究史を整理して問題の所在を明らかにした上で、石器群のファブリック解析とサイズ・ソーティング分析を行い、その形成過程を検討した。その結果、Xb層を主な出土層準とする一群とXa-IX層下部を主な出土層準とする一群は層位的に区分でき、両石器群の特徴から編年的にも区分し得る事を指摘した。武蔵台遺跡は、尾田会員が発掘調査した遺跡であり、その詳細な検討方法は、当時の活動痕跡の区分単位を評価する上で今後参照すべきケーススタディーと言える。したがって、尾田会員の当業績は論文賞に相応しいと考える。

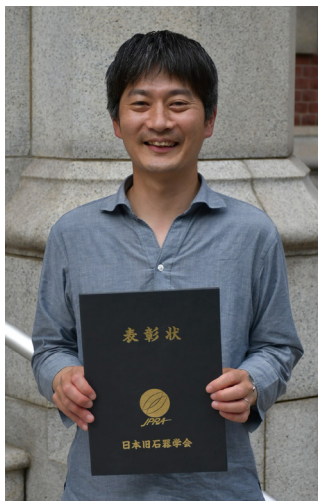
(日本旧石器学会賞選考委員会委員長 佐野勝宏)
受賞の言葉 (尾田 識好)

この度は、2020年度日本旧石器学会論文賞を授与いただき、誠にありがとうございます。

受賞の対象となった論文は、東京都埋蔵文化財センターで調査を行う機会に恵まれた武蔵台遺跡の資料を分析したものです。私がセンターに入って最初に担当した遺跡でもあります。

私ごとで恐縮ですが、センターに入る直前に結婚披露宴を催し、御出席いただいた佐藤宏之先生から、「君は武蔵台を担当することになるから、しっかり勉強しておくように」と「祝辞」をいただき、身が引き締まったことをよく覚えています。

調査では、予想どおり、立川ロームX層段階の良好な資料が出土しました。そこで、かねてより議論となっていた石器群の区分について、北海道での遺跡調査、特に佐藤宏之先生の吉井沢遺跡、出穂雅実先生の嶋木遺跡の調査研究で学んだ地考古学的方法を適用するとともに、中沢祐一氏の遺跡形成過程分析を参照に検討し、立川ロームXb層とXa層～IX層下部の石器群を層位的に区分でき、それらに時期差があることを追認しました。



尾田 識好 会員

自身がフィールドとしてきた北海道で学んできたことを新天地での研究に生かし、一定の成果を得られたということで、手ごたえを得ることのできた論文でした。それを論文賞という形で評価していただき、たいへん嬉しく思います。調査中は多くの方に御指導・御教示いただきました。この場をお借りしてあらためて御礼申し上げます。

日本列島における後期旧石器時代の始まりについては、重要な研究成果が相次いでいます。私も武蔵台遺跡を足掛かりに、議論に貢献できるよう、引き続き研究に取り組んでまいります。また、最近は縄文時代草創期の前田耕地遺跡の再検討を、佐藤宏之先生や森先一貴氏、岩瀬彬氏など多くの方と共同で進めています。これらの成果については、学会での研究発表や学会誌で公表し、学会員の皆様と議論を積み重ねていきたいと思っております。今後とも、御指導のほどよろしくお願いたします。

2021年度若手奨励賞

青木 要祐 会員

((受賞時)東北大学大学院,(現)新潟大学)

選考理由

若手奨励賞は、日本旧石器学会の研究発表で優れた発表をした若手会員(当該年度4月1日時点で35歳未満)に授与する。当委員会は、青木要祐会員を2021年度の若手奨励賞受賞候補者として選考した。

青木会員は、第19回研究発表会において、「本州における白滝型細石刃石器群の黒曜石利用」に関して発表した。青木氏は、岐阜県宮ノ前遺跡から出土した黒曜石製石器の産地分析を行い、宮ノ前遺跡では長野県の霧ヶ峰系や八ヶ岳系等の黒曜石の他、秋田県男鹿系の黒曜石も持ち込まれている事を明らかにした。また、石器表面に残るマイクロ痕跡にも注目し、遠隔地の男鹿産の黒曜石を中心に、いくつかの資料に運搬痕跡が残されていることを指摘した。更には、宮ノ前遺跡を含む本州における白滝型細石刃石器群の産地分析の結果を総合的に考察し、北海道白滝産の黒曜石が本州に持ち込まれ南下する過程において、男鹿地域が拠点的な役割を果たしていた可能性があることを導き出した。発表の目的、方法、結果が理路整然と説明され、当研究成果の意義と今後の更なる展開も明快に示されていた。したがって、本発表は若手奨励賞に相応しいと考える。

(日本旧石器学会賞選考委員会委員長 佐野勝宏)
受賞の言葉 (青木 要祐)

この度は、第1回となる2021年度日本旧石器学会若手奨励賞を授与いただき、誠にありがとうございます。

受賞対象となりました発表は、新たに行った岐阜県宮ノ前遺跡出土黒曜石製石器の原産地分析結果を報告するとともに、先行研究を踏まえて本州の白滝型細石刃石器群の黒曜石利用、そして北海道から南下した後の拡散過程について述べたものです。共同発表者の佐々木繁喜氏には原産地分析の基礎から導いていただき、後輩でもある傍島健太氏には度重なる要望・議論にに応じていただくことで本発表に至ることができました。

今回対象地域とした本州のほか、学生時代には北海道にも足しげく訪問して多くの資料を実見させていただき、時にはヒグマの気配を感じながら黒曜石原産地の踏査にご同行いただくなど、各地で大変お世話になってきました。一昨年の総会で本賞の創設と合わせて次年度大会の北海道開催が決定されて以来、これまでの恩返しにもなると思えば賞を目指してきましたので、受賞に至り実に嬉しく思います。

自身の研究における軸は本発表の中心となった黒曜石原産地分析のほか、石器の微細痕跡研究、製作技術分析にあります。これらはいずれも東北大学在学中に形成されたもので、阿子島香名誉教授・鹿又喜隆教授をはじめとした学内外の方々にご指導を頂いてきました。特に、学部3年時の演習講義で「石器使用痕の研究史」と題して発表して以来、微細痕跡は研究の基盤となっており、製作技術分析では製作痕跡を捉え、本発表の原産地分析においても遠隔地石材の運搬痕跡に言及するなど、今日の研究に大きく影響を与えております。学生時代にこうした視座を養うことができたことは何事にも代え難い僥倖でありました。これまで支えてくださった多くの方々に改めて御礼申し上げます。

受賞ののち、幸運にも職を得て現在は新潟大学で学生指導及び研究にあたっております。自己の研鑽に加えて、先達から学んだことを後進へ伝え、繋いでいく所存です。



青木 要祐 会員

2021 年度普及講演会報告

表記の普及講演会が2021年9月25日（土）と10月23日（土）に開催された。今回の普及講演会は、2001年に発覚した旧石器捏造事件から20年余りの歳月が経過したことを受け、テーマを「日本旧石器時代研究の現在—旧石器捏造事件発覚から20年—」とし、捏造事件発覚以後、日本における旧石器研究の組織と体制、問題意識の変化、そして日本列島の旧石器時代研究の最前線を知る機会として設定された。昨年度は昨今の新型コロナウイルスによる影響から実施できなかったこともあり、今年度は会場を設けずオンラインでの開催の運びとなった。初のオンライン開催ということもあって参加人数を危惧したが、登録者数は約80人にのぼり、捏造事件を契機とした日本の旧石器時代研究の現状への関心の高まりを感じさせた。

9月25日開催の第1回では、小野昭氏（東京都立大学名誉教授）が「旧石器捏造事件を契機とした問題意識と体制の変革—過誤に学ぶ—」と題して講演を行った。氏は捏造事件発覚以降、日本旧来の孤立的な研究のあり方に警鐘を鳴らし、国内外の研究組織・体制の新たな立ち上げや関連諸科学との連携の強化を促してきた経緯について回顧された。そうした役割を担ってこられた氏の「地域・日本列島・世界という3つの階層構造を意識し研究を行うことが重要」という言葉からは、志操堅固の強さを肌身に感じた。10月23日に開催した第2回では、佐藤宏之氏（東京大学教授）が「日本列島後期旧石器時代の成立に関する展望」と題して講演を行った。氏はユーラシア初期旧石器時代研究の現状を概観した上で、大型石刃技術の認められた長野県香坂山遺跡の調査成果である「大型石刃・小石刃・尖頭器」の組成と技術的系譜、東アジアにおける石器群比較から日本列島における後期旧石器時代成立とその背景について最新の見解を述べられた。

捏造事件発覚以後、国際的な組織運営・体制の整備、問題点の洗い出し、意識改善、研究の推進など、日本における旧石器研究において中心的役割を担ってきた両氏の講演は、日本旧石器研究の現在地を知り、研究を深化・発展させていくために必聴の公演となったと思われる。（沖野 実）

データベースワークショップの報告

2021年6月27日（日）にオンライン上にて開催した日本列島旧石器時代遺跡データベース（以下DBと表記）ワークショップ・群馬マッピングパーティーについて報告します。

今回は群馬県を対象としたワークショップを企画し、岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会の協力を

得て実施しました。また初の試みとして、対面ではなくオンライン上（Zoom）での開催となりました。昨年・今年と新型コロナウイルス感染拡大の影響を学会全体として受け、DB委員会でもこれまで行ってきた対面でのワークショップや普及活動を自粛せざるを得ず、約1年ぶりの開催を期した形となります。

参加者はのべ11名、講師はDB委員の小原俊行会員が務めました。オンライン上での開催は当初不安もありましたが、「更新作業のワークフロー」を共有するという目的に対して十分な効果を発揮すると感じました。もともと複数人が各々で作業を進められるよう、クラウドストレージや「ひなたGIS」「全国遺跡報告総覧」といったオンライン上の仕組みを活用していたこともあり、作業の習得や共有に問題はありませんでした。

一方で実際の改訂作業においては、場合により紙媒体の資料にあたる必要や現地を良く知る研究者の意見を聞く必要が生じるため、オンライン上では完結しないという問題もありました。これに関してはオンライン・対面形式両方の課題として、ワークショップ後のサポートを充実させるという方向で対応を検討しています。

DB委員会では、今年度中に新潟・愛媛県合同でのオンラインワークショップの開催、および更新作業を終えた地域のデータをWeb公開することを予定しています。また、各地域の会員各位から、データの更新・追加にご協力いただける方を随時募集しております。

第20回大会一般研究発表・ポスター発表の募集

2022年6月4日・5日に、名古屋大学（愛知県名古屋市）にて第20回総会・研究発表・ポスターセッションを実施します。ついては、一般研究発表とポスター発表を募集します。発表の中からは若手奨励賞の選考も行いますので、若手会員の皆様には積極的なエントリーをお願いいたします。詳細については近日中に日本旧石器学会HPに掲載予定です。なお新型コロナウイルスの感染状況によっては開催方法について変更が起こる可能性がありますので、学会HPでの確認をお願いいたします。

役員選挙について

役員選挙について

2021年12月20日

会員各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 佐藤 孝雄

日本旧石器学会の役員選挙告示

日本旧石器学会会則6・7条および役員・会計監査委員・顧問選出規定により、下記のとおり、役員選挙を実施いたします。

記

1. 立候補者・候補者推薦の受付

立候補者および候補者推薦は、別記作成方法により、2022年2月5日（土）までに日本旧石器学会選挙管理委員会（〒108-8345 東京都港区三田2-15-45 慶應義塾大学 文学部 渡辺丈彦研究室気付）に届け出てください。その折に公報に掲載する原稿は100字以内です。

2. 選挙公報・投票用紙

2022年2月下旬に発送します。

3. 投票期間

2022年3月1日（火）～3月20日（日）

4. 役員の決定

投票の結果、得票数の上位22位までを役員とします。ただし北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、九州・沖縄7地区の上位得票者から役員1名を選出し、他15名を上位得票数数によって役員とします。辞退者がいる場合は順次繰り上げとなります。

5. 被選挙権のない会員

現役員22名は全員改選の対象になります。以下の会員を除く全会員に被選挙権があります。被選挙権がない会員は、諏訪間順、渡辺丈彦、小野章太郎、門脇誠二、小原俊行、下岡順直、山崎真治、尾田識好、です。

2021年12月20日

立候補者・推薦者各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 佐藤 孝雄

日本旧石器学会の役員選挙にかかわる公報の原稿作成について（依頼）

役員選挙立候補・推薦にかかわる公報の原稿については、下記により作成方お願い致します。

記

1. 原稿作成方法

A4版横書きのペン書き、またはワープロ原稿（A4、10.5ポイント、横書き、ワード他）。なお、ペン書きの原稿はワープロ原稿に直して掲載します。

1. 推薦候補

①候補者名、②推薦内容、③推薦者氏名

2. 立候補

①立候補者名、②自薦内容

②の内容は100字以内でお願いします。

2. 送付方法

下記に郵送してください。推薦候補の場合は、本人の承諾を示すサインまたは押印、推薦者のサインまたは押印が必要です。また、立候補の場合は電子メールに添付して送付しても構いません。

3. 原稿締切

2022年2月5日（土）

送付先

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

慶應義塾大学 文学部 渡辺丈彦研究室気付

電子メールアドレス jimupalaeolithic.jp

2021年度学会賞の推薦について

「日本旧石器学会賞規定」に則り、2021年度の学会賞受賞候補の推薦を募ります。旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員を推薦してください。

1. 推薦内容：学会賞受賞候補
2. 推薦期間：2021年10月1日（金）～2022年2月13日（土）（必着）
3. 推薦者の資格：日本旧石器学会員
4. 推薦方法：学会賞受賞候補の氏名、学会賞受賞候補の推薦理由、推薦者の氏名・連絡先をご記入の上、郵送もしくは電子メールにより下記の事務局あてに送付して下さい。
5. 注意事項
 - ・推薦は自薦・他薦を問いませんが、お一人につき一名を限度とします。
 - ・学会賞受賞候補は、日本旧石器学会会員に限りませす。推薦にあたって、学会賞受賞候補ご本人の承諾を得る必要はありません。
 - ・推薦の書式は自由です。
 - ・推薦理由は概ね100字から300字にまとめてください。
6. 応募先・照会先：日本旧石器学会事務局
（担当：渡辺丈彦・国武貞克・森先一貴）
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
慶應義塾大学文学部 渡辺丈彦研究室気付
(jimupalaeolithic.jp)

お知らせ

メーリングリストの運用について

日本旧石器学会ではメーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものですが、これまでその登録についてはあくまで任意のお願いというものでした。

一方、新型コロナウイルス感染拡大にともない、各種学会行事の変更などがこれまで以上に増加する

ことが予想され、学会と会員、そして会員間でのより迅速な情報共有が喫緊の課題となっています。その解決のためには、メーリングリストの更なる有効活用と登録率の向上が必要であることから、このたび役員会での議論と了承のもと、メーリングリストへの登録を原則として義務化することにいたしました。ご理解を賜れば幸いです。

まだメーリングリストへの登録のお済みでない方は、携帯電話のメールアドレスでも構いませんので、事務局のメールアドレス (jimupalaeolithic.jp) までお知らせください。

会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されていますので、会費は原則前納制としております。ニュースレター前号同封の払込取扱票を用いて、今年度分会費の納入をお願いします。振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局で簡単に手続きいただけます。これまでもお知らせしておりますとおり、2018年度より年会費が6,000円になりました。御理解のほどよろしく申し上げます。

また、会費滞納は本会運営に大きな支障を招く原因になりますので、前号同封の会費納入状況を御確認のうえ、2020年度以前の会費を未納の方は、未納分もあわせて納入をお願いいたします。

転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等で御連絡ください。

日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード (<http://palaeolithic.jp/join.htm>) し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第49号

2021年12月20日発行

編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会

山崎真治・赤井文人・山田和史

発行: 日本旧石器学会

事務局: 〒108-8345

東京都港区三田2-15-45慶應義塾大学文学部

渡辺丈彦研究室気付

E-mail jimupalaeolithic.jp

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>